踏　み　跡　＜　My　mountains　＞

ハヶ岳	冬山合宿偵察（赤岳鉱泉から主要峰を経て渋の湯へ）	No.075

10月の練習山行から20日程してからの打合せで、我が初の冬山合宿は又しても苦境に立たされることになった。恩田が体を悪くしてドクターストップをかけられてしまった。彼のリードなくして冬の木曽御岳は不可能だ。残りの三人がある程度の経験を持つ山として、奥秩父、ハヶ岳を考えることにした。そして、しばしの議論ののち結論として「ハヶ岳」が確定した。
夏のハヶ岳は三人とも経験しているが、心新たに冬のハヶ岳を研究しなければならない。
恩田からリーダーを命じられた。もうあと50日を切ってしまった。

昭和41年11月26日
11月ももう少しで終わり。おそらく冬山本番ではこのコースを使うだろうという予想で、ひとり赤岳鉱泉に入るべく、新宿駅の夜行列車を待つ行列に並んだ。まだ21時30分だというのに、23時45分発の列車に乗るための行列は尋常ではなかった。
八貫のキスリングにピッケルを持ち、見てくれは一人前の山男の格好だったが、緊張感と晩秋のプラットホームの寒さとで体は硬直していた。
霧が峰に行くという太田さん、阿部さんが合流したことでいくらか緊張はほぐれてきた。と言うよりも、もう列車に乗ってしまえば帰るわけにはいかず、前に突き進むしかないというのが本音だったかもしれない。満員の列車で三人掛けで座ることになった。

昭和41年11月27日（快晴）
笹子で足元の通路にいた10人ほどのグループが降りていき、スペースができたので床に横たわる。明日山はどんな表情で自分を迎え入れてくれるのだろうか？そう思っただけでもなかなか寝付けない。
しばらく脳裏をかすめる映像を追っているうちに、いつしか無限の世界に吸い込まれるように・・・。
目が覚めると甲府、次に目が覚めると小渕沢、夏ならもうハヶ岳が姿を見せてくれる頃だが、さすがに11月末の空はまだ真っ暗。信濃境、富士見、青柳、寝坊してはならじと眠い目をこすりながらハイライトの煙を揺らしていると、「ちの～、ちの～」。5時50分、茅野駅のアナウンスを聞き再び緊張感が体を支配し始めた。
二人に別れを告げて下車。二度と戻れない旅になるのでは？ との不安がちらちら。
美濃戸口へのバスは6時発、東の空は少しずつ明るくなり、ハヶ岳の姿が黒く浮かび上がってきた。
汽笛のひときわ高い響きが余韻だけを残すと、二人を乗せた長野行の列車は朝のしじまの中を諏訪盆地に向かってレールを鳴らして走り去った。
乗り込んだ少々寸詰まりなバスは、暗闇の中を走り出した。有料道路の看板を車窓に見送る頃からハヶ岳はモルゲンロートの中に一層力感のこもったシルエットを描くようになり、寝不足の目を嫌と言うほどに引き付ける。山肌には白い筋がありありとうかがうことができる。
車中で野中さんからの差し入れのドーナツを食べ、赤い空の黒い影絵を凝視しているうちに、いつしか不安感は消え、むらむらとやる気が盛り上がってきた。そのやる気は次に安心感を誘い、安心感は寝不足の体に容赦なく眠りをしかけてきた。

踏　み　跡　＜　My　mountains　＞

美濃戸口、7時05分。まず寒い！ というのが第一印象。遠くに北アルプスの山波が白く線を引いている。ルンペンストーブで暖を取り、出発。美濃戸山荘8時20分、朝食を用意してこなかったので、山荘でそばを食べることにした。（70円）空腹が治まり体が温まったところで9時20分に出発。柳川北沢に沿った山道に入る。雪を踏むようになると、目の前の阿弥陀岳は山肌の細かな凹凸まで見せてくれるようになり、少しずつ山に入って行くという実感が迫ってくる。

広い河原のゴーロの奥に立つ赤岳鉱泉に11時に到着、気温は−3℃。

阿弥陀、赤岳、横岳、硫黄と赤岳鉱泉を囲む三方のピークは頭上を圧するがごとき迫力。残された一方は柳川下流方面、遠く紺碧の空の彼方に中央アルプスと乗鞍がわずかに見られる。昼下がり、誰もいない天幕が数張り黄色く鮮やか。樹林帯にツェルトを張り、昼食。

明日のための偵察として、硫黄岳への道に入ってみる。

霧氷の小さな小枝越しに見える赤岳、中岳、阿弥陀岳は予想外の白さで、おそらく朝のうちはアイゼンを着けないと歩けないだろう。大同心が目の高さになるところまで登り、Uターンして、ツェルトに帰着。

（左写真：横岳大同心の大迫力）

このツェルトは重量　1Kg余、収容人員最大5名。恩田の手製によるものである。冬の山で使うのは今回が初めてで、実験山行でもある。アルペン型に張ったツェルトの中に入ってみると、黄色い布を通して午後の陽射しが目に痛い。用もないのに何度も出入りしてはベンチレータから眺め回して悦にいってみる。

アルコールバーナーの青い炎が風に音をたてるうちに二合の飯が炊き上がり、さらに豚汁の中で煮込まれて、雑炊が完成。半分は夕食に、残りの半分は明朝の朝食に。

谷間の早い夕暮れ、16時を過ぎると暗くなり始める。17時、外の気温は−6℃、ツエルトの中に入り寝床の準備。エアマットの上にシュラフを広げて、17時30分就寝。夜行列車の疲れか、すぐに眠くなってきた。

昭和41年11月28日（快晴）

0時半、2時半、目が覚めるたびに迫り来る寒さを肌で感じる。4時半起床、ベンチレータから見る空は満月と散りばめられた星屑でいっぱい。ツェルトの内側に付いた水滴が凍りつき、ランプの光にきらめいている。コッヘルに残された雑炊はジャガイモとタマネギ の凹凸もあらわに凍結し、蹴飛ばしてもこぼれる心配がない。バーナーの火にかざすとシューッと音を立てて汗ばむように水分を出し始めてくる。5時から朝食。

6時サブザックで出発。ヤッケ、オーバーズボン、オーバーシューズ、アイゼン、ピッケル・・・フル装備。

気温は−16℃。覆いかぶさるように立ちはだかる大同心の白髪を着けた岩肌は一層の冷たさを感じさせる。凍りついた沢を数回渡り、赤岩の頭を目指してアイゼンの爪あとを残しながら登って行くと、阿弥陀、赤岳が朝日に紅に染まって見える。

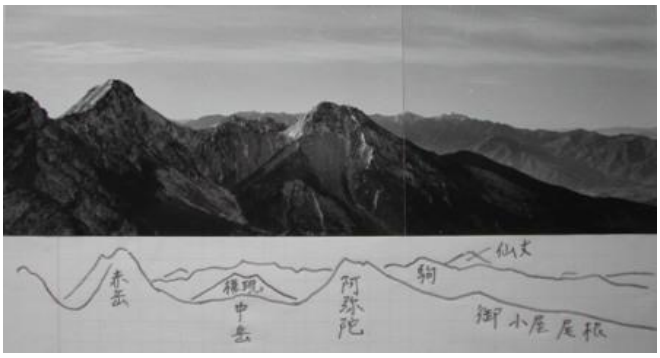
硫黄から横岳へと続く裸の稜線が段々近づいてくる頃、赤岩の頭（2656m）に到着。

オーレン小屋への道を分け、西のかなたには北アルプスの峰々が信じられぬほどに見事に連なって見える。穂高から槍のトンガリ、針の木、鹿島槍、五龍、白馬、乗鞍も。そして因縁深き木曽御岳も雲の上に白い肌で3000mの偉容を誇っている。木曽の山は御岳のほかに駒、宝剣、空木、木曽殿越のくびれ、その左に甲斐駒、仙丈、白根、甲府盆地の低い雲海の中に富士の不動のピラミッド。奥秩父の金峰山はにきびのような五丈岩が目印、日光も谷川も何でも見える。

素晴らしいのは遠くの眺めだけではない。足元に赤岳鉱泉の赤い屋根と黄色い天幕が二張り、白銀の中の二点はいかにも別天地を思わせる。雪は風に飛ばされてしまい、しばらくはアイゼンの泣き叫ぶような金属音を聞きながら硫黄岳を目指して進んでいく。

踏　み　跡　＜　My　mountains　＞

7時45分、だだっ広い硫黄岳の頂上（2760m）に到着。雨量観測小屋は吹き付ける風に顔をしかめるように建っている。夏沢峠の二棟の小屋、オーレン小屋ともに眼下にはるか遠く人の気配も感じられない。
大きなケルンの影に隠れて写真を撮ろうとするが、風にあおられてなかなかピントが定まらない。火口壁の稜線を石室に向かう。風は右半身に嫌と言うほど叩きつけてくる。



「天然記念物キバナシャクナゲ保護地区」 と書かれた白い看板が風にうなりをあげ、バラ線の囲いも氷結した雪の中に沈み、わずかに雪の上に葉を覗かせたハイマツだけが唯一の植物の姿。
横岳への登り、まず北峰へ風との真剣勝負。時々はためくヤッケの袖に意外な風の強さを感じる。
横岳は、北峰、主峰、三叉峰、石尊峰、鉾岳、日の岳、二十三夜峰の七つの峰からなっており、頂上は主峰の2830m 三角点を有す。主峰から日の岳までは針峰を東に西に上り下りしながらの通過で、西に出た時には風は針峰の間から顔面一杯にぶつかってくる。逆に東側は風に吹き溜められた雪が陽光に輝く銀鱗をなし、風もまったくない天国。富士を見ながらの絶好の休み場所だ。
風に雪を飛ばされた岩峰にアイゼンの痛々しい響きが耐えない。難関と思われた横岳を通過すれば赤岳はもう目の前。
赤岳石室9時45分、軽い食事の後、雪のよくしまった急斜面をアイゼンを利かせて30分で二度目の赤岳頂上に到着。2899.2m夏の眺めも素晴らしかったが、今新雪を着けた山々の360度の展望はさらに力強い。特に目の前の阿弥陀岳は跳躍したら届きそうな近さである。
赤岳頂上から （左）富士遠望　　（右）阿弥陀岳

8月に来た時に小屋で、「夏山でのビバークについて」 熱く語り合ったアルバイトの女の子たちは今どうしているだろうか。
さらに南下して龍頭峰のコルから西へ赤岳の腹を巻いて中岳のコルへ。岩場に雪がへばりつき、かなりの悪条件である。足元が狂えば眼下に立場川の深い谷が口を開けて待っている。トラバースして下るとその勢いで中岳を越えてしまった。
阿弥陀岳、目の前に立ちはだかるその姿は威圧感さえ感じる。阿弥陀の頂上からの眺めは別に今までと大きく変わりはないが、ただ赤岳の大きさにだけは驚く。硫黄岳から見た赤岳は尖峰の如く、また横岳からはコブの如く見えたのに、ここから見ると高さも幅も数倍大きく感じる。権現岳は頂上の岩塊が目印。蓼科山を筆頭に北八つの山並みもうっすらと雪化粧している。
コルに戻って食事とひなたぼっこ。誰もいない静かなコルで、風の当たらない場所を選んで腰を下ろしているとポカポカしてくるうちに春の草原で昼寝でもしているような錯覚に陥る。だが、ここは今一面の銀世界。

コルから少し下って樹林帯に入るともう風は全然ない。快適に走りぬけ、赤岳鉱泉の黄色い我が家にたどり着くと、まだ13時20分。アイゼンバンド、オーバーシューズを枯れ枝にかけて陽だまりに腰を下ろすと、横岳西壁の不動の姿がまるで目をそむけることを許さぬかのように堂々と立っている。
今日一日で予定をすべて消化してしまったので、明日は北へ縦走してみようと思い地図を眺めてみることにした。天気が良ければ麦草峠までは行けるだろう。天気が良くなければ勿論ここに停滞。
今日の夕食は焚き火で御飯を炊くことにした。
17時就寝、あまり寒くないところを見ると天気は崩れるのだろうか。それでも空には星が一面に輝いている。

昭和41年11月29日
起床　4時半、星は出ているが何となく雲っぽい空模様で、いかにも雪が降る直前のような空の風情に若干の心配が走る。とりあえず駒を進めることにし、食事の後ツェルトを撤収パッキングし、昨日登った硫黄岳への道に入る。硫黄岳まであと40分程のところまで来ると空から氷の塊が落ちだし、わずかな時間の間にそれは猛烈な吹雪に変わった。硫黄岳に立つ頃は風も強まり雪は横殴り。ヤッケから出た顔面にカ一杯ぶつかってくる。
ヤッケはバタバタ音を立てて雪に打たれ、あっという間に風を受ける半身が真っ白になってしまった。
夏沢峠に行けば破屋があるので、とにかくこらえて下る。
峠の小屋は夏の賑わいをよそに荒涼として、外れた戸口からは雪が舞い込み河原の乞食小屋の様相。
時間は　9時、軽い食事をしながら吹雪の様子を見ることにした。
しかし一向に止む気配は感じられない。気温もかなり急激に低下している。このところの天候の循環から見ると、明日以降もどういう天気か察しがつく。この先へ突き進むのは止めにして黒百合平からでも下るか？
10時20分、止まぬ吹雪の中を出発。天狗岳への一時間半の行程はかなり厳しいものがあった。
根石岳を過ぎて針葉樹林を抜けると、賽の河原のような裸の太尾根になりまともに風を受ける。ピッケルの木部までが雪で真っ白になり、ヤッケはまたまた雪だるま状態に。風を受ける左顔面は半ば麻痺状態。睫毛は凍結してしまい、瞬きができないこともある。
吹雪で薄っすらとしか見えないスリバチ池を横に見送り、13時25分黒百合平に到着。雪は少しずつ治まって来はしたが、空は依然として雪雲。夏沢峠で検討したエスケープ・プランどおり、ここから下山することに決定。吹雪の中の行軍でろくに食事もとっていないので、残った食料で味噌汁も作り豪華な昼食とする。
渋の湯への下りは所々に青い氷を覗かせた緊張の連続の「人泣かせな道」。
茅野から夜行列車に乗り、山行計画に一日の余裕を残して早朝帰宅した。
八ヶ岳の本当の凄さを見た今回の旅、吹雪の経験、ツェルト生活・・・・・、結構役に立つ経験ができた偵察山行になった。正月の冬山本番への自信が沸いてきた。

以上